

文学における生と死と

——『春雨物語』など——

加藤 富 一

一

生まれた者は死ぬ。文学の中で、人はどのように生き、どのように死んだか。まず『春雨物語』に描かれた女の死にざまを考察しよう。

あさましき世わたりする者にて候。御念仏さづけさせたまへよ。

(「宮木が塚」)

「念仏」をさずけてもらおうとする女は、名を宮木という。遊女である。自分が「あさましき」女であることを認識して、このように願う。願われる人は、還俗させられて名を藤原元彦と改めた、法然上人である。承元元年(一一〇七)二月、土佐国に流される途中、法然は播磨の津に碇泊した。宮木がそれを聞いて、小船で港にやって来る。「自分のような者でも、極楽に往生できるでしょうか。できるのでしたら、どうかお念仏をおさずけください」。宮木は、こう願うのである。

二

そのころ法然は、「南無阿弥陀仏」と称えれば極楽にいけると説き、一般民衆の心をとらえた。人がこの世を生きていくには困難が多く、死んでも地獄に行くことになるかもしれない。それが、「阿弥陀仏」にすべてを捧げると称えれば、弥陀に撰取されるというのである。宮木は苦界に生きて来た。その世界から浄土に行こうとする。苦界の初めは次のように描かれている。

宮木が父は、都の何がし殿と云ひし納言の君也しが、いささかの罪かうぶりて、司^{つかさ}解^きけ、つひに庶^{しやん}人^{にん}にくだされしかば、めのとよしありて、此^{こゝ}かん寄^よの里^らにはふれ来たりて、住みたまへりり。

父は都に時めく中納言であつたが、罪を得て庶民におとされ、神崎に住みついたのである。

物語はさらに、宮木が遊里に売られ、歌舞音曲を習い、十五になつ

た年から座敷に出るようになったことを描く。そして宮木は、客の一人と愛し合うようになるが、その男が毒殺され、世の無常を知る。世の中を生き抜くことは難しい。そこで、清らかな世を求めて法然に願う。「御念仏さづけさせたまへよ」と。物語は次のように続く。

上人見おこせたまひ、「今は命すてんと思ひ定めたる人よ。いとかなしくあはれ也」とて、船の舳に立ち出でたまひて、御声きよくだふとくだからかに、念仏十べん授けさせたまひぬ。

宮木はこの世に未練を持たない。その思いつめた表情を見て、上人は悲しむ。強く生きよという言葉は出て来ない。ただ「念仏十べん」を高らかに授ける。上人は、これしかできないのである。宮木はこれをそのまま口移しに唱える。唱え終わって、そのまま水に落ちる。上人は「念仏うたがふな。成ぶつ疑ふな」と言葉をおくる。

三

さて、作者上田秋成がこの物語の拠りどころとしたのは、『撰陽群談⁽²⁾』である。この書には、この部分が次のように述べられている。

声高ク同音ニ念仏シ今ゾ心ノ罪ナシト五人諸共合掌シみちびき導玉へ
御ン僧ト云ヒモ敢ズシテ水底ニコソ飛入

実話の遊女は「五人」である。五人は自分を、「あさましき世わたりする者」と考え続けていたに違いない。秋成は、五人の悲しみを「宮木」に代表させる。「今ゾ心ノ罪ナシ」は、念仏を疑わない遊女たちの確信である。「心ノ罪」は、「あさましき」行為に対する罪障感である。

自ら進んでする行為ではない。多くは、貧しい家庭を救うために売られたのであろう。それは犠牲的行為である。けなげである。しかし世間は、そのけなげさを認めない。女の心の奥底を見ない。表面の肉を見る。金で買われたあわれな人間と見る。そして女も、この世のならわしによってしか自己を見ることができない。宮木は、肉を売らざるを得なかった自己を卑下する。「あさましき世わたりする者」と。

しかし、「念仏」は宮木の卑下をうち砕く。心に重くよどんでいた罪業感を消し去る。「南無阿弥陀仏」と称えれば、必ず救われると信じたからである。弥陀は衆生済度の大願を立てた。その弥陀にひたすらにすがれば、無垢の身になれるのである。この安心が女の心にみなぎる。女は「水底ニコソ飛入」るのである。女にとって「水底」は奥津城ではない。楽土である。摂取された人間の住む浄土である。

四

ところで、浄土を願望する者は多い。宮木のこの話には、次のような前書きがある。

後鳥羽のあんな上つぼねに、鈴虫・松虫とて、二人のかほよ人あり。上人の御をしへをふかく信じて、朝夕念ぶつし、つひに宮中をのがれ出でて、法尼となり、庵むすびて行ひけるを云々。

後鳥羽上皇に仕えた二人の美しい女房がいた。鈴虫と松虫である。法然の教を信じて、ついに出家する。

この二人は宮木のような「あさましき世わたり」はしていない。華やかな宮中に生きている。宮木のような罪悪感はないはずである。ところが、「上人の御をしへを深く信じ」る。いったい、何がそうさせる

のであろうか。それは、世を浮世と感ずるからであらう。浮いているものは安定しない。無常である。華やかな宮廷にも愛憎が渦巻き、また昨日の権力者が追放され、時めいた上臈が病に犯されて冷たい死骸となる。生死常なき人の姿を目のあたりにした時、二人の女房は永遠なるものを希求したのである。弥陀の名号を称えれば、永遠の楽土にいけるといふ。これを聞くと、金と権力と欲情が渦巻くこの浮世にいる気はなくなるのである。

生老病死は人の常である。諸行は無常である。この問題を解決しようとして釈迦は王城を捨てた。鈴虫と松虫は宮廷をのがれた。前途に永遠なるものがほのかに見える。それは浄土である。阿弥陀仏が導く極楽浄土である。

ところで、その阿弥陀とは、アミターユス⁽³⁾とアミターバ⁽⁴⁾という二つのサンスクリット語であらわされるものとされる。無量寿と無量光と。これは永遠なるものである。無量寿は永遠の生命である。これをキリスト教では神といい、永遠の生命を信ずる者に洗礼を授ける。無量光は永遠の光明である。日本では、『古事記』の天照大神であり、人に永遠の祝福を贈る。

永遠の生命といえ、秦の始皇帝は方士の説を信じて、海外にも生命の霊薬を求めた⁽⁵⁾が、見つけることができなかった。また古代オリエントにおいて新バビロニアのネブカドネザル二世は、⁽⁶⁾永遠の生命を与えたまへとマルドゥク神⁽⁷⁾に祈ったというが、その記録を残しただけで、王の肉体は亡びた。

このように、人はみな永遠に生きたいと願う。洋の東西を問わない。時の古今を問わない。この願望に答えたのが阿彌陀仏である。弥陀は、わが名を称える者を摂取しようと誓った。永遠の生命を与えようと約束した。鈴虫と松虫は、その誓約を信じた。そして華やかな宮廷を去っ

た。

五

この女房の出家に対し、次のような反応がおこる。

帝御いかりつよくにくませしかど、いかにすべく思ひ過ぐしたまふに、叡山より、「仏敵也」と申して、上人を訴へ出づ。「是よし」とて、土佐の国へ流しやりたまふ。

「かほよ人」が法然のもとへ去った。法皇は怒る。院の権力より大きいものがあることを認めるわけにはいかない。外面は僧形でも、内心は俗世の王者である。屈辱感にさいなまれる。しかし、二人が出家したからといって、法然を罰するわけにはいかない。法皇は悩む。その時、南都・北嶺の旧仏教が新興の念仏に圧迫を加えようとし、専修念仏の禁止と法然の処罰を要求する。法皇は「是よし」と法然を土佐の国に流すこととする。

その法然が土佐への途次、播磨の室の津に碇泊したのである。かくて宮木は上人の念仏に救われ、浄土に往く。秋成は物語の終わりに、次の長歌をたむける。

(略) 玉藻なす なびきてぬれば うれたくも かなしくもあ
るか かくてのみ 在りはつべくば いける身の 生けるとも
なしと(略)

「客になびいて寝る身は悲しい。これでは生きている甲斐がない」と宮木が悲しむのを追悼する。

しかし、肉体の死を宮木は悲しまない。歎びにあふれて浄土に旅立つ。憂き世を浄土に一変させることが望ましい。けれども、宮木にとってそれは不可能であった。せめてあの世で、しあわせになりたい。念仏によって宮木の願いはかなえられた。

六

このように、宮木は現世に喜びを見いだすことができなかった。では、現世にしあわせはないのか。宮木に似た女の場合を考えてみることにしよう。

「なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て」

(ヨハネ伝八ノ八)⁽⁸⁾

イエスの言葉である。イエスが、オリブ山で夜明けごろに民衆に説教をしている。そこへ学者・パリサイ人らがやって来る。姦淫のとき捕らえられた女をつれてくる。イエスにむかっていう。「師よ。この女は姦淫の所に捕らえられた。モーセは律法において、このような者を石で撃つことを我々に命じている。このような場合、あなたはどのように言われますか」と。

モーセはユダヤ教の最高権威である。前十四世紀に、苦役の同胞を率いてエジプトを脱出し、約束の地へ人々を導いた人である。彼は脱出にあたり、守るべき十戒を示した。これは絶対の権威を持つ。これを守らなければ、同胞は苦役から脱することができない。そして、その戒律の一つが「汝姦淫するなかれ」⁽⁹⁾である。これを破った者は石打ちの死罪である。ところが人間は罪深い存在である。ついうっかりと姦淫をする。民族集団としては、その結束を乱す姦淫を許すことはで

きない。モーセが、緊急事態を切り抜けるために厳しい戒律を示したのは、無理からぬことである。日本の仏教でも、古代仏教が厳格な戒律を守り、肉体を苦しめる行をした。それは、苦行によって欲望を抑え、罪から遠ざかり、理想の境地に達しようとしたものと考えられる。学者・パリサイ人は、この絶対権威をイエスにつきつける。イエスは権威を守るべきであろうか。守れば、愛とゆるしを説く自己の教えに反することになる。権威を否定すべきか。否定すれば、ユダヤの正義に楯つくことになる。学者・パリサイ人は不動の勝利を信じている。その時、「身を屈め、指にて地に物を書いていたイエスが言った。「なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て」と。実は、モーセその人も「罪なき者」ではなからう。したがって、時には姦淫の心を起こすであろう。姦淫を思うだけでも、姦淫そのものと同じ視されるのが戒律である。モーセはしかし、自分すら行えない戒律を同胞に強いねばならぬ。無理とわかっていて、あえてそれを強制しなければならぬ。自分ができないのだからと弱気になることは許されない。民族を解放せねばならぬからである。人である以上、姦淫の心を持つことはある。そして事実、姦淫することはあり得る。しかし、にもかかわらず、姦淫を禁止しなければならぬ。

人の世に絶対は、実はない。しかし、学者・パリサイ人はモーセの十戒を絶対とする。これに反することは許されない。だから自信をもってイエスに問うた。「あなたはどのように言われますか」と。イエスは、罪をおかさずには生きていけない人間の根源を知っている。だから答えた。「なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て」と。「罪なき者」。生きた人間に、これはいない。死んだ者はもはや罪なき者であろう。また、人間が創りだす神も罪なき者であろう。それ以外に「罪なき者」はいない。人は生まれた以上罪を背負っている。原罪がそれである。古代

印度で、釈迦は皇太子として妻子もあつたが、さらに情欲にとらわれ、利益にも走る自分を抑えることができなかつた。出家の動機は、これからの脱出である。このことに気づいたのが善導⁽¹⁰⁾である。善導は、既に述べた「阿弥陀仏」を信じた。この仏は、罪に悩む人間を撰取する願いを立てた。そして火に焼かれる苦行を何年も続けたといわれる。罪深い人間にかわつて、自ら身を焼いて罪をつぐなつたのである。だから、その「阿弥陀仏」にすべてをささげ、「南無阿弥陀仏」と称えれば、仏はどのような罪人も救つてくださる、というのである。これが善導の浄土信仰であり、日本において法然がこれを受け継ぎ、その弟子親鸞によつて鎌倉期の日本全国に弘布されたのである。

かくて、イエスの考えは浄土教と同じ流れのものといえる。イエスは女を撰取した。姦淫をした罪深い女を救つた。女は現世で救われた。ところが、ここで宮木が問題になる。宮木の現世は苦界であつた。そして、そこから解放されるのはあの世でしかなかつた。水に沈まねば浄土はなかつた。この宮木を、現世で撰取する方法はないのか。これについて、以下考察してみよう。

七

人は世俗において生きていけない時に、世を捨てる。日本においては西行や良寛などがある。まず西行は、世を時めく北面の武士であつた。若き日の平清盛と先を争うエリートであつた。それが二十三歳で出家した。取りすぎる四歳の娘を縁から蹴落として家を出る。青年佐藤義清にとつて、権謀術数の渦巻く宮廷や、その他自己を束縛する世俗のしがらみから、決然脱出するしか生きる方法はなかつたのである。頭を丸めた西行は諸国を行脚して、自分の生きるところを探す。そして次の歌を詠む。

はるかなる岩のはざまにひとりゐて

人めおもはで物思はばや

(新古今卷十二恋二)⁽¹¹⁾

若き日の強烈な恋を西行は思い出す。「人め」は恐ろしい。自分はいつも「人め」を気にして生きて来た。胸をこがすあの人への思いも、世間の眼をはばかつたせつないものであつた。人のいない「はるかなる」地の、だれもない「岩のはざま」で、あの人のことを心ゆくまで思いたいものだ、というのである。

世のしがらみは西行を縛る。燃え上がる恋心も、世間の厳しい監視に冷える。自分をだいじにしたい。生きているからには、青春を謳歌したい。それには世間から離れるしかない。遙かなる孤独の地。これが自分が自分を生かすところだ。西行の心は定まる。しかし、

さびしさにたへたる人の又もあれな

庵ならべん冬の山ざと

(同前卷六冬)

隣人がほしい。深い山奥にひとり住んでいると、出家の時のあの強い決心が揺らぐ。孤独に耐えようとした覚悟が動く。このさびしさに耐える人がもう一人いてほしい。そうすれば、励ましあつて生きていくことができる。四歳の娘を蹴落とした時のあの勇猛心はどこへ行つたのか。あの心をふるい起こせば、隣人なんかいらないのであるが、と思うのである。

西行は、さらに考える。いや、そうではあるまい。あの心は弱い心なのだ。蹴落とすことをしないで、家を出て来る心のほうが、大勇猛心なのだ。それがないから蹴落としたのだ。自分の心は弱いのだ。だから今になって心が揺らぐのだ。もう一人同じような人が隣に来ては

しい。このように、やはり西行は出家しても心の動揺がやまない。かくて、出家して解放されたかに見える西行は、実はまだ解放されていないのである。僧形の西行は、実是在俗の義清と変わらない。しょせん、生きているかぎり、偉大なるものに摂取されることは不可能とすべきか。

八

次に良寛を見よう。良寛は、天保二年（一八三一）七十四歳で没したということがわかっているだけで、公の記録は全くない。一生権力に近づかず、越後の民衆に祝福をおくりつづけた人である。十八歳で出家し、文化元年（一八〇四）四十七歳のころ、国上山くがみの五合庵に定住した。当時の無題の詩に次のものがある。

生涯身を立つるに懶もろく

騰々天真に任す

囊中三升の米

炉辺、一束の薪

誰か問わん、迷悟の跡

何ぞ知らん、名利の塵

夜雨、草庵の裡うち

双脚、等閑に伸ばす

（原漢文¹²）

「懶く」は、怠惰な気持ちである。なまけ心である。世俗に生きるのは気が進まない。生きるための駆け引きができない。「昼行燈」とあだ名をつけられた自分である。それは天真のものであり、他人から見れば無我無欲である。人はそれに心を洗われる。自分に迷いとか悟り

とか名付けるものではなく、世俗の名誉とか利益とかに対して何の関心もない。この五合庵で、ゆったりと二本の脚を伸ばしている。

この詩には、世を捨てた「等閑」が歌われている。処世的権謀から解放された喜びがあふれている。そして良寛には捨てるべき俗世があつた（宮木は買われた身で、捨てれば追手が来る。捨てるべき世間はない）。次に良寛に左の短歌がある。

うちつけに死なば死なずて永へて

かかる憂き目を見るが佗しさ

文政十一年（一八二八）の大地震の時の作である。良寛七十一歳。「死なば」のあとには「よからまし」が省略されている。「死んでいたらよかつたのに」というのである。ところが死にもせずに生き残っていた。なまじつか生きのびたので、こんな悲しい目にあうのが佗しい、というのである。良寛は、「うちつけに」死ぬことを望んだ。あっさりとしたのである。たれ流しなどになって生きながらえたくはないのである。ポックリといきたいのである。人なみである。良寛も、たれ流しは「憂き目」である。しかし、だからといって自殺するわけにもいかない。憂き世から離脱することは許されたが、生命から脱出することは許されていないのである。また次の長歌がある。

この夜らの つか明けなむ

この夜らの 明けはなれなば

をみな来て 尿はりを洗はむ

こいまろび 明かしかねけり

ながきこの夜を

良寛は癌による下痢に悩んでいた。死病の床での作である。入滅前年の七十三歳。「をみな」は貞心尼である。彼女は十七八歳で結婚したが、五年の後、夫と死別。剃髪して修行にはげんだ。良寛の高風を慕い、歌を学びたいといって、そのころ良寛が住んでいた木村家別舎にやって来た。数年して、良寛はかねて恐れていたたれ流しになった。こうならないために、「うちつけに」死ぬことを願ったのであるが、人の生は解らぬものである。どうなるかは、なってみるまで解らないのである。なりたくないたれ流しになって、それでも自ら死ぬことはできない。「朝になったら貞心尼が来て、糞尿を洗ってくれるであろう。それまでは、七転八倒して長い一夜を耐えねばならなかったよ」。与えられた生を自らの意志によって断つことのできぬ良寛の声が胸をうつ。

九

鈴虫と松虫は、宮木と比べると恵まれていた。ただ、諸行の無常をこの世に対して感じたのである。それは西行も良寛も同様であった。権勢と財力がすべてであるこの世に恒常なるものはない。これらのものは、いつかは消え去るものである。それを目前に見た時、永遠の生命と永遠の光明とを望むようになる。それは洋の東西を問わない。そして時の古今を問わない。人類の長い歴史の中で、多くの人がそれを求めて来た。しかし、その望みが果たされることはなかった。果たされないが、人は求めずにはおれない。そこで、追い求めて出家する。しかし、出家しても生と死を制御することは出来ない。それがどうなるかは、結果によって解るだけである。結果を自ら創り出すことはできない。西行も良寛も自分の力が卑小なことを感じた。人間の限界を

感じ、苦の渦中に生きつづけた。

それに対して宮木は、生きつづけることをしなかった。出家できる者は、生きつづけることができる。しかし、宮木は金で縛られている。かくて出家できない宮木は、一足飛びに浄土へ行った。一方、イエスに救われた女は、永遠の生命と光明を与えられたわけではない。一時の危難を救われたにとどまる、といえよう。あと生きているうちに、また姦淫を行わないという保証はないのだから。そして鈴虫や松虫も、また西行や良寛も、しょせん動搖のうちに生きるしかなく。それは、宮木の肉体を売る苦行と相去ること少ないものと考えることができよう。

注

- (1) 宮木が塚 『完訳日本の古典』二九七頁。以下『春雨物語』からの引用文は、すべて『完訳日本の古典』による。
- (2) 摂陽群談 地誌。一七巻一七冊。岡田俣志著。元禄十一年序。同十四年刊。
- (3) アミターユス Amitayus 無限の寿命をもつもの。藤田宏達『善導』による。
- (4) アミターバ Amītabhā 無限の光明をもつもの。同前による。
- (5) 霊薬を求めた 『史記』秦始皇本紀第六。
- (6) ネブカドネザル二世 Nebuchadnezzar II 在位紀元前六〇四〜前五六二。新バビロニアの王。
- (7) マルドック神 Marduk バビロンの守護神。
- (8) ヨハネ伝八ノ八 日本聖書協会『旧新約聖書』近代日本の代表的文語訳聖書による。
- (9) 「汝姦淫するなかれ」 旧訳聖書「出エジプト記」二〇ノ一三。善導 唐の僧。六一三年、中国山東省臨淄県(一説に安徽省泗県)に生まれる。曇鸞・道綽の中国浄土教(インドから伝来)を継ぎ、これ
- (10)

(12) (11) を大成した。
新古今巻十二恋二 『日本古典文学大系』による。次の歌も同じ。
原漢文 書き下し文は、吉野秀雄『良寛 歌と生涯』による。
以下引用の短歌・長歌も、これによる。